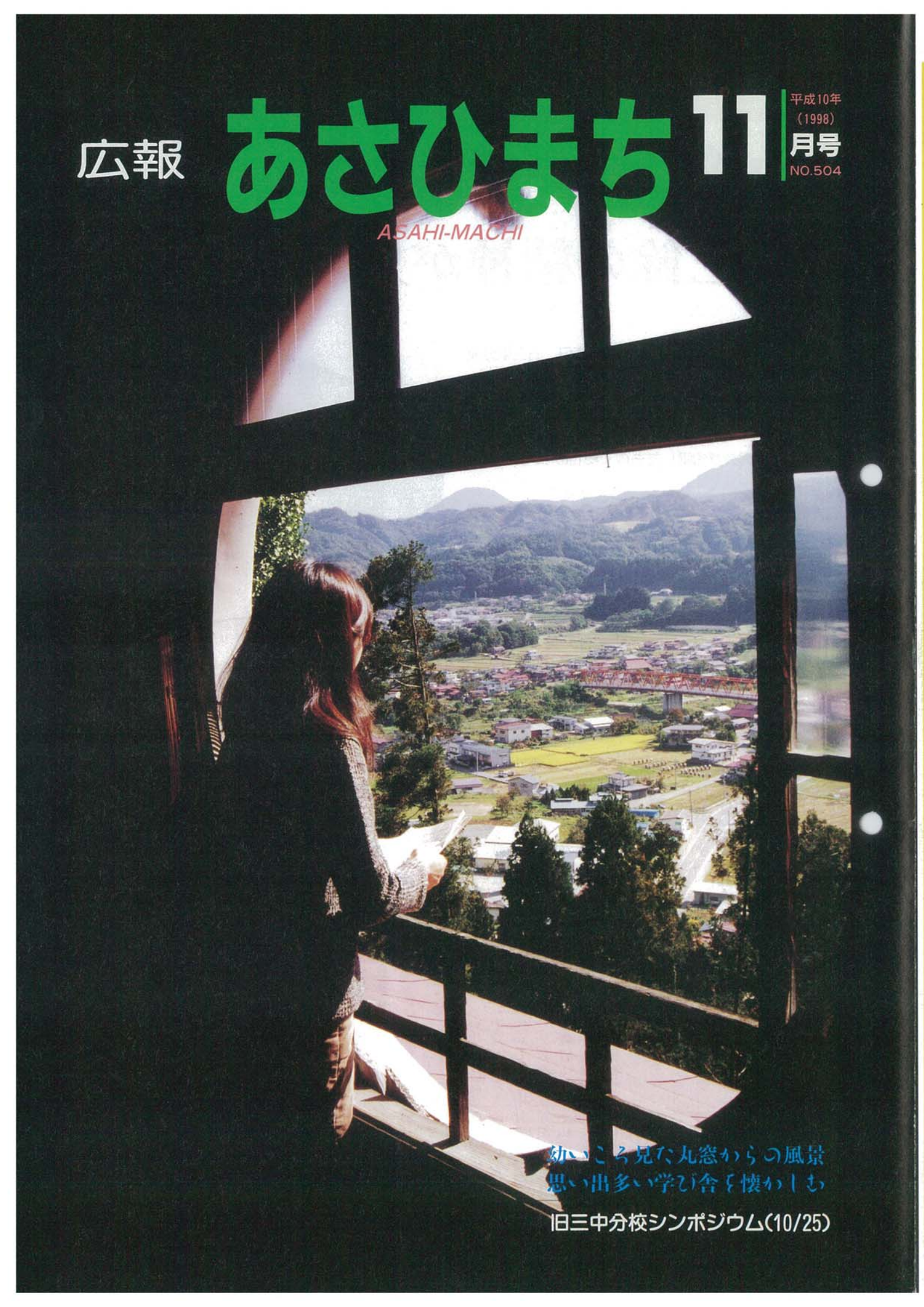
広報

あさひまち

11月号
平成10年
(1998)
NO.504

ASAHI-MACHI



幼いころ見た丸窓からの風景
思い出多い学び舎を懐かしむ

旧三中分校シンポジウム(10/25)

丸窓を開いてみれば 三餘（さんよ）の心（こころ）が見えてくる

「旧三中分校シンポジウム」が10月25日、旧三中分校などを会場に開催されました。このシンポジウムは、平成８年３月に閉校した旧三中分校の文化財的価値を見直し、エコミュージアムの町づくりを進めようと町エコミュージアム研究会が企画したもので約150人が参加しました。

今月はこのシンポジウムを中心に、第１章は「三餘学校は私たちの宝物」をテーマとしたパネルディスカッション。第２章は若宮寺で行われた「寺子屋の文化祭」。第３章は「朝日町エコミュージアム物語」の３部構成で紹介し、朝日町のめざすエコミュージアムについて考えてみます。

—第１章—
三餘学校は私たちの宝物
パネルディスカッション

閉校した今でも心に生き続ける三中分校

●**司会**　本日は、明治十五年に建てられた町の文化財でもある丸窓のユニークな学校「旧三中分校」を、もう一度、地域の宝物として保存し、その活用を考えるシンポジウムです。

卒業生のみなさんからは在学当時の思い出を、石島先生からは三中分校の歴史などについてお話しいただき、みなさんと共にこれからの活用方法について考えたいと思います。

●**鈴木**　三中分校へは、昭和五年、六年と在学しました。当時の入学児童数は二十二人で先生が一人、子供たちは着物（和服）やもんぺで通学していました。また、現在のようなノートがなかったことから、石盤（筆記用の粘板岩の薄い板。昔、子供が石筆で文字や絵を書くのに使った）を使い「はな・はと・まめ・ます」などと読み書きをしていたものです。

終戦後は、三中分校を使い素人演芸会を開いていました。農作業が終わると自然に地区民が集まり、ああでもない、こうでもないと夜遅くまで練習した思い出があります。

●**海野**　私が入学したのは昭和二十八年で、児童数は五十人くらいだったと思います。当時の思い出は、一生懸命に掃除をしたことや校舎の周りを走り回ったこと、学校の帰り道で化石探しや魚捕りをしたことなどが記憶にあります。

最近までは、私の住む能中地区の「協友会」という若衆会で、年一回、校舎周辺の清掃作業をしていました。また同級会では、集合場所を三中分校にして、思い出話に花を咲かせています。やはり、大人になった今でも、何かしら三中分校と関わりをもっていたい気持ちがあります。

●**佐竹（千）**　私は昭和六十二年の入学で、児童数は十人でした。授業は普通の教室での授業のほか、野山の探検や青空教室などがあり、楽しかった思い出があります。小人数だからこそできた授業だったと思います。

また、三中分校は、勉強だけでなく遊びでも中心でした。これは昔からそうだったと思いますが、卒業してからもつい立ち寄ってしまう、そんな忘れられない存在ですね。

三中分校120年のあゆみ

▼明治８年……八ツ沼村若宮寺に八ツ沼学校を設立（三中分校の始まり）。同年、八ツ沼村、能中村、西船渡村が合併し三中村となる。
▼明治９年……八ツ沼学校を三中学校と改称する。
▼明治15年３月……三中学校新築工事が始まる。
▼同年11月……和洋風三層木羽葺の新校舎が落成。校名を「三餘学校」と改称する。
▼明治20年……三餘学校を三中尋常小学校と改称する。
▼明治25年……三中尋常小学校を西五百川尋常高等小学校三中分教場とし、尋常科の２学級を置く。
▼明治37年……西五百川実業補習校三中分校を開設。
▼昭和５年……西船渡の児童が本校に通学するようになる。
▼昭和16年……国民学校令の公布により西五百川村国民学校三中分教場となる。
▼昭和22年……教育基本法、学校教育法の公布により「６・３制」を実施（義務教育９年）。西五百川村立西五百川小学校三中分校と改称する。
▼昭和29年……西五百川村、宮宿町、大谷村が合併し朝日町となる。校名も朝日町立西五百川小学校三中分校となる。
▼平成７年……創立120周年記念式典を行う。
▼平成８年３月15日……本校への統合により分校閉校決定。閉校記念式典を行う。
▼同年３月31日……三中分校閉校。

閉校式での記念撮影

出席者

石島庸男氏

（いしじま・つねお）山形大学教育学部教授57歳。山形県教育資料館友の会事務局長。主に地域教育の歴史を研究。

佐竹千鶴氏

（さたけ・ちづる）八ツ沼在住18歳。左沢高校３年。放送委員長としてＮＨＫ杯放送コンテストで優勝。三中分校へは昭和62年、63年と在学。

鈴木栄一氏

（すずき・えいいち）八ツ沼在住74歳。農業。三中分校へは昭和５年、６年と在学。

海野義弘氏

（うんの・よしひろ）能中在住51歳。会社員。三中分校へは昭和28年、29年と在学。

佐竹充廣氏

（さたけ・みつひろ）八ツ沼在住63歳。農業。現在、八ツ沼区長を務める。三中分校へは昭和16年、17年と在学。

司会者 安藤昭郎氏

（あんどう・あきお）西町在住54歳。現在、町立西五百川小学校校長。郷土学習に力を入れている。

三餘の精神とは 夜・雨・冬を利用し修養に励むこと

●**司会**　ありがとうございました。みなさんにとって三中分校は、学び舎というだけでなく、長い年月が過ぎた現在でもなつかしい気持ちに浸れる「故郷（ふるさと）」のような存在であるようです。

次は石島先生から、三中分校の歴史についてお話ししていただきます。

●**石島**　三中分校の歴史について、八ツ沼学校の設立から三餘学校までをお話しします。三中分校は、明治八年に八ツ沼村若宮寺に八ツ沼学校として設立されたことから始まります。同年、八ツ沼村、能中村、西船渡村の合併により三中村となり、翌年には三中学校と改称しました。その後、児童数が増えたことからでしょうか、明治十五年三月に現在の校舎である三中学校の新築工事がはじまり、同年十一月には、和洋風三層の新校舎が落成。校名もシンポジウムのタイトルである「三餘学校」と改めています。

おそらく山形県内においてこの三中分校は、擬洋風（和風造りでありながら洋風造りを装った建物）の建物では一番古いかもしれません。

●**司会**　お話の中に三餘という言葉がありましたが、校舎新築に伴ってなぜ、三中学校から三餘学校と改名したのでしょう。

●**石島**　『西五百川小学校百年のあゆみ』によれば、中国の魏（ぎ）の古書『魏略書（ぎりゃくしょ）』の「日餘夜　時餘雨也　而年餘冬也（日の余りは夜にして、時の余りは雨なり。

丸窓を開いてみれば 三餘(さんよ)の精神(こころ)が見えてくる

そして年の余りは冬なり）にあるといわれています。この三つの余りは農作業もできないことから、過ごし方によっては、どのようにも過ごせるものです。しかし、若者たるものは、夜と雨と冬こそ活用し修養に精進せよ、との教訓ととらえることができます。

私なりに解釈すれば「働くこと、生きること、生活すること」の本業を大切にし、その余りを自分なりに工夫し時間を見つけて、有効に勉強に結び付けようということだと思います。本業も余業も一生懸命に取り組もうという心が「三餘の精神」であったのではないでしょうか。

三中分校の値打ちを知り 三餘の精神を実践することが大切

●司会　ありがとうございました。佐竹区長さんからは、地域と三中分校との関わりについてお願いします。

●佐竹（充）　昔は公民館がなかったことから、地域活動や青年団、消防団活動となると、毎晩のようにこの校舎の三階に集まり、酒などを飲み交わしながら語り合った記憶があります。

　このように三中分校は、子供たちだけでなく大人も公民館的なものとして利用した地域に根差した学校でした。閉校となった今でも三中地区のシンボルとして、私たちの心にしっかりと生き続けている宝物です。

　平成九年に町の有形文化財に指定され、歴史的価値がある建物であることは間違いありませんが、地区民みんなの思い出が染み込んだ三中分校の今後の活用方法について、地域をあげて考えていく必要があると思います。

熱心に耳を傾ける参加者のみなさん

●司会　佐竹区長さんからは、今後の活用方法について地域をあげて取り組んでいこうというお話がありました。では、具体的な活用について、みなさんの考えをお聞かせください。

●海野　町内はもとより町外の方たちにも、歴史的情緒あふれる三中分校を見て、触れて、感じて欲しいと思います。それにはまず、町の観光マップに掲載し、案内看板などを設置する必要があると思います。

●佐竹（千）　古いものがどんどんなくなってしまう、こんな時代だからこそ、いつまでも残して欲しいと思います。

●鈴木　町の文化財であるこの三中分校を、宝の持ち腐れにならないようにする必要があります。カギをかけそのままにしておくのではなく、郷土資料館や教育資料館として活用すればいいのではないでしょうか。

　また、本当にりっぱな自信の持てる三中分校を残していくために一番大切なことは、この三中地区に住む私たちが、もっと三中分校のすばらしさを学び、さらに「三餘の精神」を実践することが必要だと思います。

地域のことを研究する積み重ねが エコミュージアムの町づくり

●司会　それでは最後に、石島先生よりお願いします。

●石島　今、国の重要文化財には、洋風のめずらしい建物しか指定されていません。しかし、三中分校のように擬洋風を装いながら、地域のみなさんの力で建て、約百二十年間も守り育ててきたことに、日本における教育界の重要文化財として、残していく意義があると思います。

　もし、資料館のようなものにするのであれば、国や県に頼るのではなく、町や地域の人たちの手でつくり上げて欲しいと思います。みなさんが協力しながら、三中分校や地域のことを研究するという積み重ねこそが、「朝日町のエコミュージアムの町づくり」なのではないでしょうか。まとめ上げていくのは、この地域に住むみなさんです。

●司会　大変貴重な提言ありがとうございました。これを契機に地域の身近な宝物に光を当て、地域を見直し、エコミュージアムの町づくりが進んでいくことを願い本日のパネルディスカッションを終了します。ありがとうございました。

基調講演

「三餘学校の文化財的価値について」

東北大学名誉教授　佐　藤　　巧　氏

在来の伝統的技法に従いつつも、意欲的な西欧建築への指向も見えるざん新でユニークな建物。地元棟梁（とうりょう）の技量の知られる作例として貴重であり、建築史上、文化財的価値は高い。

佐藤　巧　氏（さとう・たくみ）

山梨県生まれ76歳。早稲田大学理工学部建築学科卒。東北大学で建築史、意匠（デザイン）の教べんを執り、教授を経て名誉教授となる。現在「佐藤巧古建築研究会」代表として建築史および意匠に関する調査、研究、設計、監修にあたる。そのかたわら宮城・山形両県の文化財保護審議会委員なども務め、貴重な文化財の保護、修復に貢献している。

旧西五百川小学校三中分校は、明治十五年に建てられたものであり、非常に古い校舎です。

全国的に見て学校としてはもちろんのこと、明治初期の時代に建設された三階建ての建物で現在まで残っているものでは、大変珍しいものとなりました。山形県内でも同時代の三階建ての建物は、おそらく三中分校しか現存していないと思われます。

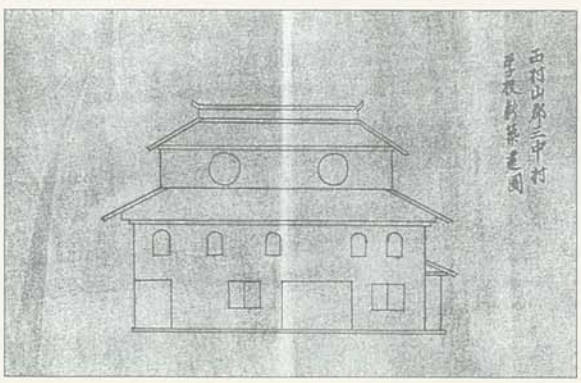
創建当初の姿については、設計図などがないために詳しいことは分かりませんが、現状から見えるこん跡や申請図として提出された『三中村学校新築建図』（図①参照）を参考にすると、二階の窓は現在よりずっと少なく、縦長の細い窓が相互に離れて配置されていた可能性があります。部屋の間取りや外観についても、時代とともに改修を重ねたようです。

現在の建物の概要（図②参照）を説明すると、木造三階建てで、総二階建ての建物の上に、面積を縮小した三階が載った形となります。基礎は自然石を切り出したものに直接柱が建つ石場建てです。窓の開口部は片引きや引き分け障子戸を用いています。壁の部分は和風の土蔵造りで、壁に明けられた丸窓が大きな特徴となっています。

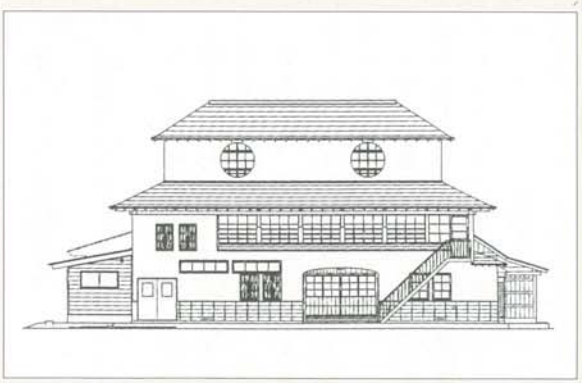
本来丸窓は、西欧のレンガや石を積み重ねる組積造りでできるもので、当時の日本にその技術はありませんでした。三中分校の丸窓は、土蔵造りの白壁に丸い型枠をはめ込む「擬洋風的建築手法」で造ることにより、洋風に見せる努力をしたと考えられます。このようなことから、創建に際しては、まったく西欧指向がなかったとはいえないと思います。

要するに三中分校は、明治初期の時代において、和風様式を基にした、堂々たる白亜（白壁）の三階建ての建物で、学校建築としては、非常にざん新でユニークな存在であります。大工の棟梁（とうりょう）の名も明らかであり、在来の伝統的技法に従いつつも、意欲的な西欧建築への指向も見える、地元大工棟梁の苦心の作といえます。

一部に改修の跡も見えますが、保存状態は良好です。明治初期の地方における学校として、また当時の新しい建築に対処した地元棟梁の技量の知られる作例として貴重であり、建築史上、文化財的価値は高いものと考えます。現在、破損が進んでいる所もあることから、今後の利用方法も考え、その保存修復には、十分の考慮を期待しています。



図①　三中村学校新築建図



図②　旧三中分校正面図

—第2章—

寺子屋の文化祭

手づくり文化祭で地域を見直すきっかけに

旧三中分校シンポジウムの第二章では、旧三中分校の出発点である「若宮寺」において、語りや人形劇、郷土芸能などを発表した「寺子屋の文化祭」を紹介します。

この文化祭は、八ツ沼地区に伝わる伝承や昔話、歴史的景観のすばらしさを多くの方に知ってもらおうと企画された、八ツ沼地区の手づくりの文化祭です。参加されたみなさんの中には、町内に住んでいながらこうしたものを見る機会がなく、まったく知らなかった方もいると思われます。そんな方のために、目で見て、耳で聞いて、体で感じてもらおうというものです。

また、八ツ沼地区のみなさんにとっても、地域の宝物をどう活用し、後世に伝えていかなければならないのかを改めて考えるきっかけになったのではないでしょうか。第一章のシンポジウムと合わせて、これらはまさに、地域で出来るエコミュージアムの実践といえます。

先人たちが残してくれた大切な遺産を見直し、これからの町づくりに生かしていきましょう。

①おはなし会ぶなの実による伝承「八ツ沼の七不思議」を基に創作された人形劇「化け石」
②若宮寺境内に展示された「八ツ沼の七不思議」写真パネル展
③人形劇「化け石」を鑑賞し、笑顔がこぼれる子供たち
④登坂高典さんによるお師匠様の話。若宮寺の建立や八ツ沼の歴史などを分かりやすく説明
⑤西五百川小6年の鈴木裕子さんによる「松程堰の研究」（写真）と同小6年の熊谷友希さんの「石須部の石碑調べ」が研究発表された
⑥八ツ沼に伝わる昔話をおもしろおかしく語る鈴木直子さん（大町）
⑦郷土芸能「奴（やっこ）振り」を披露する八ツ沼地区のみなさん

特集 ◔ エコミュージアムの里　八ツ沼物語

丸窓を開いてみれば 三餘（さんよ）の精神（こころ）が見えてくる

まちの案内人からひとこと

「温故知新」の楽しさをみなさんに伝えたい

■小松　寿一　氏
（こまつ・としかず）
八ツ沼在住65歳

八ツ沼は、まさに歴史のふるさとです。八ツ沼城跡や若宮寺、春日沼や春日神社、そして旧三中分校と歴史スポットがたくさんあります。そして、それらに関するさまざまな伝説が数多く存在し、有名なものに「八ツ沼の七不思議」というものがあります。いつのころから語り継がれてきたかは分かりませんが、「鈴ガ森の鶏の声」や「大石の化け石」などの伝説が今なお伝えられています。

十月十一日に、ふるさと文化講座「八ツ沼七不思議めぐり」で案内人を務めました。人前で話した経験などあまりなかったので、大変緊張したということが率直な感想です。

みなさんの前で話をするために、もう一度八ツ沼の歴史を調べ現場に行って調査しました。そうすることによって、次々と新たな発見に出合うことができます。それが私にとって何ともいえない楽しみであり、歴史の魅力となっています。

この活動を通して感じることは、八ツ沼以外にも町内には、歴史的な価値のあるものがたくさんあるのではないかということです。でも、あまりに身近すぎて気付かないことがあるのではないでしょうか。大切なことは自分の足元に光を当て、地域をよく調べることでそこに住む誇りや魅力が生まれてくるように思われます。

八ツ沼の魅力をできるだけ多くの人に伝えていきながら、みなさんも「温故知新」の楽しさを知るきっかけになればと思います。

八ツ沼七不思議めぐりで案内人を務めた小松さん（写真中央）
―大石の化け石前―

—第3章—　朝日町エコミュージアム物語

「徳三・権兵衛」のエコミュージアム問答

町のよさを見直し、先人たちが残してくれた地域の宝物の保存、活用を考えようと実施された「旧三中分校シンポジウム」。

ここ第三章では、仮想人物「徳三さん」と「権兵衛さん」が登場します。何やらこの二人、シンポジウムを見にきての感想や「エコミュージアムの町づくり」について話し合っているようです。さあ「朝日町エコミュージアム物語」の世界へ。

《あらすじ》
時は明治初期の三中村。江戸幕府が崩壊したことにより、明治時代が到来。文明開化により欧米の文化が積極的に取り入れられた。三中分校の丸窓もその一つ。徳三と権兵衛は、その三中分校建設に携わった人物で、あの世からお忍びで「旧三中分校シンポジウム」を見にきた。

地域の宝物を守り育むエコミュージアム

◆徳三　権兵衛さん、「旧三中分校シンポジウム」を見てどうだった。私たちが若いころ元気に働き、少しでも三中村をよくしたいとがんばっていたころを思い出してしまったよ。

◆権兵衛　本当だね、徳三さん。私たちの子孫が、三餘学校や三中村に光を当ててくれるなど、夢にも思わなかった。

ところで徳三さん、私たちが住んでいた三中村は西五百川村に変わり、現在は朝日町となったそうだ。その朝日町が取り組んでいるものに「エコミュージアムの町づくり」というものがあるらしい。舌をかんでしまいそうな難しい言葉だが、これはどんな町づくりなんだろか。

◆徳三　おれもよく分からなかったから勉強してみたんだよ。一度しか言わないから、耳をかっぽじって聞いてくれ。

まず、エコミュージアムを簡単にいえば、先人の遺産を大切にすることらしい。

◆権兵衛　先人の遺産？

◆徳三　ご先祖様が残してくれた伝統や技術、文化財や自然環境などのことだ。そのために朝日町全体を博物館にみたてるということだな。

◆権兵衛　なるほど。エコミュージアムって、昔から伝わってきた物や心や自然などの町の宝物を大切にすることなのか。だから歴史と伝承の故郷八ツ沼で、旧三中分校を見直して大切に残していこうと、このシンポジウムが行われたわけか。

◆徳三　そうだ。旧三中分校の建物は、佐藤先生が言われたように、町の文化財はもとより県の文化財になるくらい重要な建物らしい。ぜひ保存して、町の歴史資料館にでもしたいもんだ。

◆権兵衛　八ツ沼以外にも町の宝物はあるのかねえ。

◆徳三　ある、ある。昨年は江戸からお重ばあさんを呼んで、「大谷往来」に光をあてた。その前は大隅で見つかった日本最初の「旧石器のシンポジウム」も行われた。これ以外にも「名勝・大沼の浮島」や国指定重要文化財「佐竹家住宅」、県指定天然記念物「豊龍神社の大杉」や「国立公園朝日連峰」、「五百川渓谷」などもそうだ。

もちろん、リンゴの生産技術も先人たちが残してくれた大切なものだし、獅子踊りや権兵衛さんの母ちゃんの漬物の漬け方も大切な生産技術だ。本当に朝日町には宝物がいっぱいある。これを大切にし、孫の代まで誇りにしようということなんだ。

地域を見直すと新しいものが生まれてくる

◆権兵衛　ああ、それがエコミュージアムということか。

◆徳三　少しは分かったかい。もちろん、ただ守っていくだけではない。それを今に生かして活用していくことも大切なことだ。浮島や佐竹家、秋葉山などもっと多くの観光客に見てもらってもいい。朝日自然観に泊まって、ぐるっと朝日町を巡り歩くのも新しい観光づくりだ。最近りんご温泉や秋葉山に建てられた新しい案内板もそのためだ。さらに、もっともっと町の宝物を見直すことで、新しい産業が生まれてくる可能性もある。最近有名になった蜜ローソクもそのひとつだな。

町の宝物に設置された案内板

特別寄稿

「朝日町のエコミュージアムへの期待」

横浜国立大学助教授
大原　一興　氏

■大原　一興　氏（おおはら・かずおき）

東京都生まれ40歳。横浜国立大学工学部建設学科建築学教室助教授。工学博士。1995年に国内外の交流と研究、理解を深める「日本エコミュージアム研究会」の設立に携わる。現在、日本エコミュージアム研究会理事、事務局長を務める。今年12月から、同建築学教室が朝日町のエコミュージアムに関する調査を実施する予定。

海外の優れたエコミュージアムで感じられる安堵（あんど）感が、どこかしら朝日町にはある。それはおそらく、エコミュージアムにかかわる人たちの真剣な思いと、それをやさしく包みこむ澄んだ空気にあるのだと思う。安堵感とは第一に、この地域のやることには間違いがなく信頼できる、と安心して見守ることができること。そして第二に、そこに身を置いてみて何となく守られている感じがすることの二つである。住んでいる人々への信頼感と地球環境の安定感、それがエコミュージアムには必要であり大事な点であるといえよう。

海外のエコミュージアムには、よくデザインされた展示もあるが、決して展示はでしゃばらずおおげさでなく、主役の住民自身による素朴な解説がある。また住民は、日常的な保全と調査研究も行っている。そこでは訪問する先々に住民グループが待っていてくれたり、民家の軒先でコーヒーや自家製の食事をいただいたりもした。住民自身が、各々のペースで接してくれる。それがエコミュージアムの信頼と安定をもたらす基本だと思う。

朝日町においてもそれが実現できそうなのは、観光客にこびるのではなく、住民自身の地域をよく知りより良くしていこうという意志を持っていることにある。ノルウェーのトーテン・エコミュージアムでは、ノルウェー語の資料は豊富にあるが、あえて英語のパンフレットを作成していないことに感心した。あくまでも地域内の住民を対象に活動し、住民の400年にわたる膨大な個人記録や写真を収集し、子供たちの体験学習や古い家屋なども保存しているのである。朝日町も本当は、標準語で解説しなくてもよいのではないだろうか。

着実に日本のエコミュージアムの第一歩を歩む朝日町は、日本代表として世界的に有名な存在になりつつも、あくまでも未来の町の住民を育てる存在であり続けてもらいたい。

特集 ◑ エコミュージアムの里　ハツ沼物語

丸窓を開いてみれば 三餘の精神が見えてくる

動き始めたエコミュージアム

◆権兵衛　では、これからどんなことが始まるんだろか。

◆徳三　今年、町民の有志が自分たちで町の案内をしようと、エコミュージアムガイド（まちの案内人）が生まれたそうだ。希望があれば町の案内をしてもらえるらしい。

さらに「大沼浮島を守る会」のように、地域の人たちで浮島を大切に守っていこうというボランティア団体があり、将来は、これと同じように各地域の宝物を守り育んでいく「エコボランティア」を募集したいと考えているらしい。掃除や雪囲いなどをしながら、より多くのみんなに町の宝物に親しみ、誇りをもってもらおうということだな。やはり町の宝物を守り、残していくためには、町民みんなの力が必要ということだな。

◆権兵衛　徳三さん、さっそくあの世に帰って、今日学んだ旧三中分校のエコボランティアとしてがんばろうではないか。

わしら先祖も陰ながらに応援しますぞ。

（終わり）

全国の朝日町・村が大集合

第3回全国朝日交流会 in 山形県朝日町

全国の朝日町・村の首長が一堂に集う「第三回全国朝日交流会 in 山形県朝日町」が十月十五日、十六日の両日、朝日自然観を会場に開催されました。

北海道から三重県までの五町四村が参加し、二十一世紀に向けた各町村の課題や災害時の相互応援などについて意見交換が行われました。

町づくりについて活発な意見交換が行われた全国朝日交流会（会場：朝日自然観）

巫女（みこ）の舞を披露する和合小児童

「全国朝日交流会」は、平成七年に福井県朝日町で行われた全国朝日町・朝日村特産品フェアをきっかけに、今後も「朝日」の名称をもつ町村が一堂に集い相互理解と親睦を深め合っていこうと、平成八年から行われているものです。

交流会には本町のほか、北海道朝日町、山形県朝日村、新潟県朝日村、富山県朝日町、長野県朝日村、福井県朝日町、岐阜県朝日村、三重県朝日町の九つの町村の首長と関係職員ら三十一人が出席しました。

はじめに清野隆町長が「全国の朝日町と村が手を取り力を合わせて、各地域の活性化のためにがんばりましょう」と歓迎のあいさつ。名刺交換会が行われた後、空気を御神体とした世界に一つしかない「空気神社」を参拝し、和合小児童による巫女（みこ）の舞や角田流大谷獅子踊りを見学しました。その後、開催地である本町の観光地や特産品、町づくりなどをビデオで紹介し、わが町をPRしました。

首長意見交換会では、各町村の特色ある町づくりと、二十一世紀に向けた課題や重要施策について意見を交換。ホスト役の清野町長は「少子化・高齢化対策や基幹産業のリンゴの付加価値などについて、町を挙げて取り組んでいる」と説明。各町村からは、観光産業の強化や福祉対策、農・工業の再構築などの課題が挙げられました。

また、いずれかの朝日町、村において災害が発生した場合に、生活必需品や資材の提供、職員の派遣などで応援する「全国朝日連絡会災害時相互応援に関する協定（案）」が提示され、次回までに担当者間で細部を詰め、再度協議することが決定。さらに、次期開催地は富山県朝日町で行われることに決まりました。

二日目は、ワイン工場や農業研究所、世界のりんご園などを見学。同じ「朝日」という名称を縁とした〝身内同士〟が、親睦を深め合った二日間となりました。

参加者全員による記念撮影

「ふれあい荘」と
「世界のりんご園」
をご視察

常陸宮様ご夫妻が朝日町を訪問

全国少年少女発明クラブ創作展に出席のために来県していた常陸宮様ご夫妻が十月二十四日、朝日町を訪れ、特別養護老人ホーム「ふれあい荘」と「世界のりんご園」を視察され町民と交流を深められました。

入荘者に「ふれあい荘」での生活の様子をお尋ねになる常陸宮様ご夫妻

この日の常陸宮様ご夫妻は、寒河江市内でアイジー工業株式会社寒河江工場を見学された後、朝日町へ来町されました。

特別養護老人ホーム「ふれあい荘」では、風船を使ったバレーボールや手芸作品などを見学され、入荘者に施設内での生活の様子を尋ねながら「いつまでもお体を大切にしてください」と励まされました。

続いて、清野隆町長の案内で百七十種の世界のリンゴが植えられている「世界のりんご園」をご視察。ご夫妻は、真っ赤に色づいた無袋フジと東洋をもぎ取られ、品種による味や香りの違いなどを尋ねられました。

また、町内の小学生でつくる「グリーンクラブ」の児童たちが行う、リンゴの糖度や堅さを調べる作業を興味深げにご覧になりました。

常陸宮様ご夫妻のお見送りに約二百人の町民が訪れ、ご夫妻は車の窓からお顔を出し声をかけられるなど、町民のみなさんと親しく交流を深められました。

常陸宮様ご夫妻に世界のりんご園の概要を説明する清野町長

朝日山麓家族旅行村
Asahi自然観だより ⑭

スノーパラダイス！
朝日自然観スキー場

朝日自然観では、赤や黄色に色づいた周りの山々もすっかり葉が落ち、もうすぐ冬が訪れます。10周年を迎える朝日自然観スキー場は、今シーズンも盛りだくさんの企画で、みなさまをお待ちしています。

☆12月19日（土）「オープニングデー」
当日はリフト無料

☆１月16日（土）「冬の花火大会」
10周年を記念して白銀の世界に花火を打ち上げます。

☆１月17日（日）「そり大会」
はきなれたスキーを〝そり〟に変えて、みんなで楽しみましょう。

☆１月24日（日）「スノーランタンコンテスト」
森の中に、やさしい灯火がこぼれるスノーランタンをつくってみましょう。（商工会青年部主催）

☆１月26日（火）～28日（木）
「第20回山形県スキー技術選手権大会」
今年も全国トップレベルのスキーヤーが、朝日自然観スキー場で華麗な滑りを競い合います。

☆２月21日（日）
「朝日自然観ジャイアントスラローム大会」
だれでも参加できるこの大会。あなたも足だめしにどうぞ。

●お問い合わせは朝日自然観まで（☎83－2111）

※休館日のお知らせ…11月25日㈬から12月２日㈬まで、施設点検のため休館いたします。ご了承ください。

昨年のスノーランタンコンテスト

縄文晩期の木柱24本出土

上川原遺跡（舟渡）現地説明会

大谷地区担い手育成基盤整備事業に伴い、県教育庁文化財課が発掘調査を行っていた上川原遺跡（舟渡地内）の現地説明会が十月八日、現地で開催されました。

今回の調査は、舟渡地区と大江町用地区を結ぶ用橋の西側約二百平方メートルの河岸段丘（水田）で、九月二十八日から十月九日まで行われました。

この結果、今から約二千七百年前の縄文時代晩期の集落跡であったことが判明。丸木の木柱や石器などが多数出土しました。

中でも木柱は、穴を掘り柱を埋める掘り込み式のもので、約百平方メートル内に二十四本が密集して見つかりました。木柱の太さは、直径二十～五十センチ、長さは最長のもので一メートル、柱はクリ材と見られ、石おのなどで加工した跡が残っていました。木柱が埋められていた柱穴はだ円形をしており、深さは約一メートルありました。

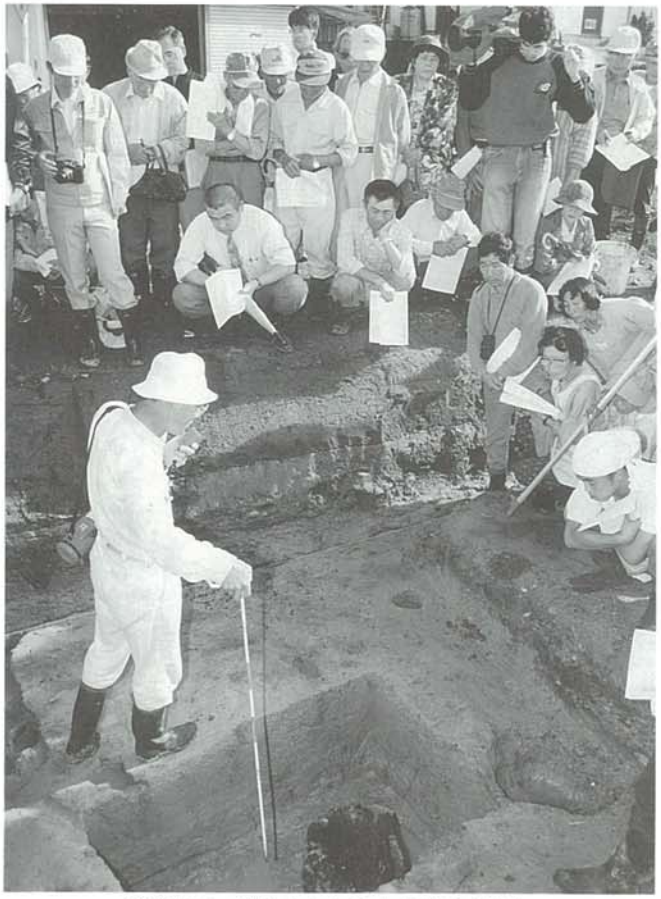
柱穴には①柱の周囲を粘土で埋めたもの②主柱を添え木の細い丸太で囲んだもの③主柱の周りに川原石と丸太材を積み上げ、根固めしたもの等の三種類がありました。

調査を担当した県教育庁文化財課では「縄文時代の建造物は、竪穴式住居跡がほとんどで、木柱は朽ちて残らないケースが多い。地下水の水位が高く、周囲が粘土質であったために腐らなかったのではないか。現段階で柱の配置と構造物の規模は確定できないが、柱が太いことと根固めの存在などから、竪穴式住居より大規模で祭祀（さいし）のための特別な意味を持つ構造物だったと推測される」と説明しました。

木注が発見された遺跡は、全国でも三内丸山遺跡（青森県）チカモリ遺跡（石川県）桜町遺跡（富山県）御井戸遺跡（新潟県）など極めて少なく、同時代の掘り込み式木柱の発見は、御井戸遺跡に次いで二例目となります。県内では、押出遺跡（高畠町）と小山崎遺跡（遊佐町）から縄文期の木柱が発見されましたが、いずれも打ち込み式の木柱でした。

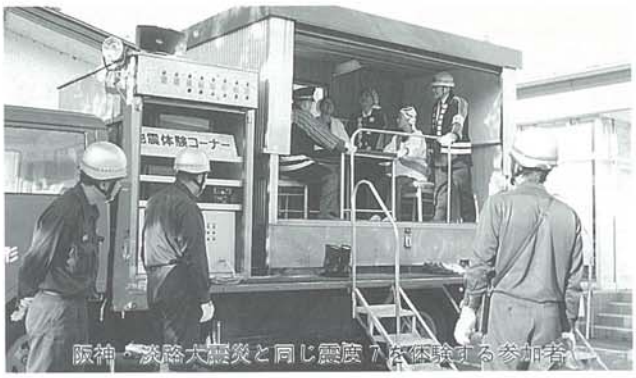
参加者は、第一級の文化財を目の前にし、調査員の説明に耳を傾け、わが町の祖先である縄文人たちの生活に、思いをめぐらしている様子でした。

同遺跡は、基盤整備事業による水路の位置を変更するなどして、現状のまま埋め戻し、保存される予定です。



建造物の一部とみられる木柱が24本出土

原形が残る約二千七百年前の木柱



阪神・淡路大震災と同じ震度７を体験する参加者

災害に備え防災訓練を実施

6,000人もの尊い命を一瞬にして奪った阪神・淡路大震災の教訓を生かし町総合防災訓練が10月25日、西船渡地区で開催されました。

この日は、地区住民や町消防団員ら約200人が参加。火災防御訓練や起震車体験訓練などが行われました。中でも起震車体験訓練では、阪神・淡路大震災と同じ震度７を体験。参加者は、地震の怖さと防災に対する日ごろからの備えの大切さを再認識していました。

10月１日付けで着任した柘植内科医長

町立病院に柘植（つげ）先生が着任

これまで町立病院の内科医長だった福井忠久先生の病気療養に伴い、後任に10月１日付けで柘植香里先生が着任しました。

柘植先生はこれまで東北中央病院などに勤務。消化器内科が専門です。

柘植先生に着任されての抱負をお聞きしたところ「体の調子が悪い場合はすぐに受診し、何でも気軽に相談してください」と笑顔で語ってくれました。

夫婦手を取り五十年

金婚祝賀会

結婚生活五十年を祝う金婚祝賀会が十月七日、町農業団地センターで行われました。対象者は、戦後間もない昭和二十四年に結婚された八十七組の夫婦で、七十五組が出席しました。

式では、はじめに清野隆町長が「みなさんは戦後の苦しい時代を精一杯生き、本日夫婦そろって元気に金婚式を迎えられたことは喜ばしいかぎりです」とあいさつ。全夫婦に賀詞と記念品を手渡しました。

続いて、金婚者を代表して阿部正義さん（松程）が「戦後の何もないときに結婚し、二人で手を取りがんばってきました」などと謝辞を述べ、五十年の足跡を振り返っていました。

祝宴では、特産の朝日町ワインで乾杯した後、みなさんが唄やカラオケで盛り上がり、会場いっぱいに笑い声が響きわたっていました。

中部地区のおしどり夫婦

西部・北部地区のおしどり夫婦

除雪対策に新戦力

除雪グレーダー購入

本格的な冬を前にした十月二十八日、除雪グレーダーが新たに購入されました。

この度購入された除雪グレーダーは、十トン級百三十馬力で約一千三百万円。地球にやさしい排ガス対策型です。

町では、今年も十四台の除雪車と十五人の除雪隊員を編成し、除雪対策に万全を期しますので、路上駐車や道路への雪出しなどがないようみなさんのご協力をお願いします。

まちの話題

まちの話題…❶　うまいものまつり

うまいもの鍋コンテスト

町のうまいものが勢ぞろい

うまいものまつりが10月18日、町民体育館で開催されました。

これは、町商工会が中心となり昨年から行われているもので、地酒「豊龍」の飲み放題や芋煮汁、特産リンゴを使った「りんごサブレ」や「りんご冷麺」「比内地鶏の焼き鳥」など町のうまいものが大集合しました。

うまいもの鍋コンテストでは、町内各団体などが６つの鍋を出品。審査の結果、ハーブやおとぎり酒を加え、数種類のキノコや野菜をぜいたくに盛り込んだ佐竹とめよさん（常盤）の「心も体もリフレッシュ・ハーブすいとん鍋」が大賞を受賞。準大賞には、夏野菜がたっぷり入った朝日山岳会の「夏野菜のカレー鍋」が受賞しました。

会場には約400人が訪れ、アイデア鍋の食べ比べや地酒などに舌鼓を打ち、秋の味覚を満喫していました。

まちの話題…❸　第11回新宿区文化祭

区民全員による手づくりの文化祭

日ごろから取り組んでいる文化活動を発表しようと10月24日、25日の両日にわたり、第11回新宿区文化祭が行われました。

公民館が主催となり毎年開催しているもので、子供会から長寿クラブまで絵画や習字、盆栽など約180点の作品が展示されました。中には取り立ての地物まつたけやスズメバチの巣など、日ごろ見ることのできないユニークな作品も出品されるなど、新宿区ならではの手づくり文化祭となりました。

まちの話題…❷ ロータリー国際交流

朝日町の秋に触れる

10月24日、アメリカケンタッキー州のロータリークラブのメンバー５人が朝日町を訪れました。

これは、県内のロータリークラブのメンバーにホームステイしながら、両国の文化交流とクラブ活動の活性化を目的として行われたものです。朝日町には、和田一則さん宅（小原）にメンバーの一人が４日間ホームステイし、交流を図りました。

当日は、大沼の浮島などの観光やリンゴの収穫作業を体験しながら、日本の秋を満喫していました。

まちの話題…❺　地域開発研究会講演会

「これから50万社が消える」経営方針を鋭く指摘

地域開発研究会講演会が10月16日、町中央公民館で開催されました。

今回のテーマは、これからの中小企業の経営方針を考えようというもので、中小企業を対象とした経営専門誌『商工にっぽん』のグループ会長伊藤小一氏を迎え、「これから50万社が消える」と題した講演が行われました。

伊藤氏は「平成の不況は物余り、すなわち社長余りから始まった。この不況から脱出するカギは、現在ある240万社から50万社を削減し、適正社長数の190万人にすることである。その厳しい戦いを勝ち抜くためには、①お客はいつの時代も神様であることを忘れないこと。②どんなときでも動じない冷静な判断力を養うこと。そのためには己を知りそして学ぶこと。③当たり前のことをしっかりやり抜くこと」とアドバイスしました。

また、「昔から株屋は株屋、魚屋は魚屋。稼業の原点を見据えて、それを全うすべき」と鋭く指摘しました。

この日集まった約200人の参加者は、伊藤氏の説得力ある経営指導に明日からの経営の参考にしようと熱心にメモを取りながら聴き入っていました。

まちの話題…❹ ウオークラリー大会

歩き 楽しみ 学ぶ

町の名所を歩いて楽しみながら学ぶ、第8回朝日町ねんりんピックウオークラリー大会が10月30日、松程地区で行われました。

この日は、町内の各長寿クラブから49チーム147人が参加。朝日町の最長のトンネル「松程トンネル（387m）」やダチョウの飼育場、長松院などを巡りながら、若者に負けない健脚ぶりを発揮していました。

上位成績は次のとおりです。

①中沢チーム　②天満チーム（助ノ巻）
③前田沢チーム

まちの話題…❼ 中体連新人戦

大活躍！朝日中学校 9種目で優勝

◆西村山地区中学校新人総合体育大会
（10／3・4　各会場）

優勝　女子バスケットボール部
〃　柔道女子団体
〃　剣道男子団体
〃　剣道女子団体
〃　和田　隼人（柔道男子個人）
〃　佐藤　裕美（柔道女子個人）
〃　長岡明日香（柔道女子個人）
〃　佐藤季莉佳（柔道女子個人）
〃　渡辺　猛志（剣道男子個人）
2位　男子バスケットボール部
〃　海野　康典（柔道男子個人）
〃　石井　康博（剣道男子個人）
〃　清野　　彩（剣道女子個人）
3位　野球部
〃　ソフトボール部
〃　五十嵐祥平（柔道男子個人）
〃　児珠　　藍（柔道女子個人）
〃　成原　由香（柔道女子個人）
〃　清野　　篤（剣道男子個人）
〃　白田　憲彦（剣道男子個人）

まちの話題…❻　第15回アップル駅伝競走大会

タスキに熱い思いを込め健脚を競う

体育の日の10月10日、第15回アップル町民駅伝競走大会が開催されました。

大会は、町中央公民館発着の11区25.7キロのコースで行われ、14チーム182人が参加。レースは混戦模様となり、10区までは大谷風チームがリード。しかし、最終区で3人抜きを演じた沢内チームが逆転し見事優勝を飾りました。

成績は次のとおりです。（敬称略）

◆団体成績　①沢内②上郷③三中④ときわ⑤大谷風⑥宮宿A⑦中沢・玉ノ井⑧松程⑨大沼・大暮山⑩前田沢⑪和合⑫宮宿B⑬大谷神⑭大谷祭

◆区間賞　1区志藤雄人（中沢・玉ノ井）2区阿部春樹（ときわ）3区堀敬美（中沢・玉ノ井）4区阿部留佳（三中）5区渡辺勝（沢内）6区安藤秀也（上郷）7区小野康仁（大谷風）8区平幸子（和合）9区浅岡若菜（宮宿A）10区安藤茂昭（上郷）11区海野宏行（沢内）

みんなのひろば

新婚さん

本町／佐藤　肇志さん　貴子さん

二人の出会いは、昨年６月に行われた町主催のアップルカップルパーティーでのこと。貴子さんに一目ぼれしてしまった肇志さんは、はやてのようにアプローチを開始。お互いにスポーツ好きだったことから、ゴルフやテニスの話題で盛り上がり、誠実で優しそうな人柄に少しずつ貴子さんも魅かれていったそうです。

交際が始まり、貴子さんの住む仙台へ週一回のペースで通い続けた肇志さん。そのかいあって今年の９月にめでたくゴールインしました。今となっては笑い話ですが、とても若く見えた肇志さんは、貴子さんに自分の本当の歳が言えず、６歳若く偽っていたという、そんなエピソードもあるお二人。

「朝日町はとてもいい町で住みやすそう」と話す貴子さんに、「いつまでも一緒にいようね」と優しく語る肇志さんが、とても印象的でした。

すてきな仲間たち ㊸

「送橋剣道スポーツ少年団」
剣の道　礼儀と積極性を学んで

今年で26年目を迎えた伝統ある「送橋剣道スポーツ少年団」です。現在は、27人の豆剣士が週二回練習に励んでおり、送橋小の学区（古槙、送橋、下芦沢）だけでなく、ほかの地区からの団員も入部するなど門戸を広げ、積極的に活動しています。

10月に行われた上山市長杯では、男女アベック優勝。県少年少女交流大会でも男子が準優勝、女子が３位の成績を収めることができました。

体育館いっぱいにあふれる気合の声と竹刀の音、そして静寂へ。礼に始まり礼に終わる剣道は、礼儀と積極性を学び、日ごろの生活も剣道をしているときのような気持ちで生活することを団のモットーとしてがんばっています。　（代表　清野剛　☎67－7241）

町立図書館 新刊紹介

今月のおすすめ

「弥勒」　篠田節子　著

仏教美術の保護のため、ヒマラヤの小国「パキスム」に潜入した新聞社員永岡英彰が直面したのはせい絶なる政変という現実であった。この世に「救い」は必要なのか直木賞作家篠田節子が満を持して問う。

「生麦事件」　吉村　昭　著

それは時代のせきを切る一太刀だった。薩摩藩士によるイギリス人殺傷事件、薩英戦争、馬関戦争…。開国前夜の騒乱と志士たちの姿を迫真の筆で描ききる。

「ルーアンの丘」　遠藤周作　著

こんなにもみずみずしい青春があった。未発表の旅行記と、これまで公開されなかったフランス留学日記の最後の六カ月間を収録。若き日の情感と人生への覚悟、信仰と懐疑、哀しみと苦しみ…遠藤文学の原点に触れる。

「脳をきたえる」　篠田友孝　著

ボケる脳とボケない脳はここが違う。ベータアミノイド、プリオン…謎のタンパク質が脳を狙う。ボケと脳の関係を最新の研究成果で紹介する。

今月の新刊

▶ヤマダ一家の辛抱　上・下（群ようこ）▶松永弾正　上・下（戸部新十郎）▶宿命―「よど号」亡命者たちの秘密工作―（高沢皓司）▶食品汚染がヒトを襲う―O157からスーパーサルモネラまで―（ニコルズ・フォックス）▶燻り（黒川博行）▶その後のシンデレラ（清水義範）▶小説始皇帝暗殺（荒俣宏）▶おいしいタイランド（酒井美代子）▶英単語で通じるトラベル会話術（藤丸卓哉）▶林住期を愉しむ―水のように風のように―（桐島洋子）▶家族の絆（鈴木光司）▶蜜月（小池真理子）▶僕の町（乃南アサ）▶ゲルマニウムの夜（花村萬月）▶ウィルスは人間の敵か味方か―最小の生物の正体に迫る―（畑中正一）▶新宿熱風どかどか団（椎名誠）

遠藤　　衛さん
（舟　渡）

ひとことトーク

「カサブランカの里　朝日町」をめざして

～フラワーショーで県知事賞を受賞～

山形県フラワーショーに出品したカサブランカが、県知事賞を受賞することができ、自分でも驚いています。

カサブランカの栽培を始めてから二年になります。普及センターやＪＡのみなさんからの指導のもと、仲間五人で悪いところを指摘したり、よい技術を盗んだりと、お互いの栽培技術の向上をめざしがんばっています。

近年は異常気象が当たり前のようになりました。カサブランカのような施設園芸は、気候の影響を受けにくいため比較的安定していますが、その分、自分の管理能力がそのまま品質に影響してきます。産地間競争が激しい中で、これからはいいものをつくり差別化を図らなければ、生き残ってはいけません。「リンゴとカサブランカの里　朝日町」をめざしてがんばります。

エコミュージアムの小径（こみち）⑤

歴史を語る

八ツ沼の郷（その②）

歴史と伝承が色濃く残る八ツ沼地区は、文化遺産の宝庫でもあります。

まず、八ツ沼の地名は、八つの沼があったことに由来します。その中で一番大きく美しいのが春日沼です。そのほとりに鎮座する春日神社は、永正元年（一五〇四年）城主原美濃守（はらみのかみ）が、奈良の春日神社から分霊を受けて建立されたといわれています。現在、旧暦のうるう年の八月十五日に行われる祭礼の大名行列は、寛政十一年（一七九九年）夏草村佐竹文右エ門が領地争いに勝ったほうびとして、松山城主酒井家（当時八ツ沼は庄内松山藩の領地だった）より春日神社に、参勤交代の格式をもった大名行列の奉納を許されたことに始まります。記録によると、当時は総勢二百八十人もの大名行列だったそうです。

春日神社参道のわきに八ツ沼城（五百川城）の登山道があります。八ツ沼城は、戦に対応する軍事拠点・四方街道の交通監視施設として、戦国期の重要な山城でした。虎口（こぐち）と呼ばれる出入り口から、屋敷跡や本丸跡の曲輪（くるわ）、矢引場（やひきば）、防御のための空堀（からぼり）や土塁（どるい）、深さ三メートルほどのくぼ地になっている人見穴、七つ井戸と呼ばれる直径三十センチほどの直列に並んだ柱穴などの遺構が残り、今もなお、その歴史を物語っています。

また、八ツ沼地区は清水も多く、高田に向かう途中に、五本の樋（とい）から流れ落ちる名水「五本樋（ごほんどい）」があります。文政年間（一八一八年～）豊向庵の土台石を使って造られたとされ、村の生活水として利用されてきました。こけ石に落ちる水音は、人の心をも潤してくれます。

名水「五本樋」

（朝日町エコミュージアム研究機構・登坂高典研究員）

町民の声

みなさんからのお便りでつくるコーナーです。町に対する意見や要望、楽しい話題、イラスト、質問などを待っています。

また、町ホームページのEメール（電子郵便）でも受け付けておりますので、どしどしお寄せください。

●あて先
朝日町大字宮宿1115番地
朝日町役場総務課文書広報係
朝日町ホームページアドレス
http://www.etos.co.jp/～asahimati/

朝日自然観でもリンゴの販売を

先 日、朝日自然観のグラウンドゴルフ大会に参加しました。町外からの参加者が大多数なこともあり、町長さんの歓迎の言葉には「りんごとワインの里　朝日町」とありました。しかし、朝日自然観の売店にワインはありましたが、リンゴは一個もありませんでした。

町外のリンゴの産地でないお客様が来たときには、リンゴがあったら喜ばれるし、町のPRやリンゴの消費拡大にもつながるのではないでしょうか。

【リンゴ生産者】

＊　＊　＊

答 朝日自然観のご利用、まことにありがとうございます。おかげさまで、今年の十月でオープン以来十年目を迎えることができましたこと、重ねて感謝申し上げます。

ご意見のリンゴ販売については、以前に見本を置き、注文発送する方法で販売しました。しかし利用者が少ないため、現在はリンゴの販売をしていません。また、朝日自然観での直接販売となると、果実の場合は新鮮なうちに販売しなければならず、売れ残った場合の取り扱いなど（お菓子で賞味期限が切れたものは、新しいものと交換してもらっています）解決しなければならない問題があります。

しかし、リンゴはワインと同じように町の顔のひとつでもあることから、イベント時のリンゴの販売方法などについて十分検討したいと思います。

【朝日自然観】

さくらんぼテレビの受信開始時期は

さ くらんぼテレビはいつから放送になるのでしょうか。子供たちの会話は、テレビの話題が多いこともあり、早く見られるようにしてほしいという話題でもちきりです。

【匿名希望】

＊　＊　＊

答 さくらんぼテレビの朝日中継局設置については、『広報あさひまち二月号』の町政スポットに掲載したとおり、今年の十二月に開局する予定です。

現在は受信ブースターなどの発注も終え、十一月下旬に試験電波が発信される予定です。十二月上旬には、町内のほぼ全域で鮮明な画像が受信できることになりますので、いましばらくお待ちください。

【企画課】

感心しとても楽しかったふたば保育園運動会

秋晴れの九月二十七日、孫が入園しているふたば保育園の運動会に、前日から胸をはずませながら応援してきました。子供たちは、のびのびと遊戯をしたり、走ったり、大きな声で応援をしたりしていました。

感心させられたのは、運動会のテーマである「リサイクル、ごみ問題」でした。親子ペアがグループになった○×クイズは、「ビンは割って袋に入れる―×」、「カンはつぶし小さくして袋に入れる―×」、「ペットボトルはふたを外して燃やせないごみ袋に入れる―○」、「革の靴は燃やせないごみである―×」などでした。また、燃えるごみを拾って燃やせないごみ袋に入れると、年長組の園児が不合格の鐘を鳴らし、正しい袋に入れるよう教えながら、「がんばれ、がんばれ」と応援していました。

父兄たちも、とてもすばらしい競技内容に感心しながら、運動場の全員が一緒になり、あれこれと考えて、楽しい一日となりました。おじいちゃん、おばあちゃんたちも、いい日だったことに感謝を込めて。

登坂　富（八ツ沼）

広報◆クイズ　図書券が当たる

【問題】
①右の写真は巨大木柱二十基が発見された舟渡地区にある「○○○遺跡」
②全国に「朝日」と名のつく町や村の数は「○つ」
③朝日町が取り組んでいる「○○ミュージアムの町づくり」

【応募方法】
正解を「広報あさひまち」の折り込みハガキに書いて送ってください。正解者の中から抽選で三人の方に図書券をプレゼントします。また、答えの下に広報の記事について感想をお聞かせください。お願いします。

【十月号の答え】①ワイン　②グリーン　③胡弓

【応募者総数】四十人

【十月号の当選者】佐藤きくゑさん（四ノ沢）・長岡弘樹さん（太郎二）・長岡祥平さん（大谷四）

こせきのまど

■10月１日～31日届出

すこやかに

（出生届）

区名	出生児氏名	保護者名
栄町	鈴木真悠	弘二
宇津野	阿部安仁	安松
栗木沢	遠藤みのり	宏憲
小原	佐藤大翔	和春
四ノ沢	田中友崇	靖士
大谷七	鈴木貴大	吉弘

おしあわせに

（婚姻届）

菅井裕一（大隅）	♥	申陽愛（韓国）
柴田敏行（真中）	♥	小野寺真美（大石田町）
佐藤肇志（本町）	♥	佐々木貴子（仙台市）
佐竹勝久（宇津野）	♥	佐藤紀子（西川町）
武田直樹（真中）	♥	冨樫泰子（寒河江市）
長岡久司（宇津野）	♥	陳秀娥（中国）
阿部浩孝（常盤）	♥	小野寺裕子（千葉県）

やすらかに

（死亡届）

区名	死亡者氏名	世帯主
本町	大沼百合子	幸廣
大谷五	白田さと	好美
杉山	渡邉トシエ	榮治
大船木	佐藤みつゑ	喜市郎
大谷四	川村きみよ	儀三郎
小原	高澤きよ	等
中沢	堀次郎右衛門	敏明
常盤	海藤功輝	功
下芦沢	岡崎慶三郎	マサエ
松原	小関みよ	忠男
大谷四	鈴木ひて	本人
松原	長岡喜一	りき

●掲載を希望しない方は、お届けの際にお申し出ください。

人口と世帯数

●平成10年10月31日現在

人口		9,814（減 14）
	男	4,865（減 6）
	女	4,949（減 8）
世帯数		2,610（ 0）

（ ）内前月比

くらしの知恵袋 ㉖

●その①

アケビは、春と秋のお彼岸に欠かせないお供え物です。アケビを使ったお菓子を紹介します。

◆アケビ菓子

《材　料》アケビ１kg（熟したもので中味を取り除く）・砂糖400ｇ・グラニュー糖１kg

《作り方》① アケビを食べやすいよう半分にし、天日で１日干す。

② ①を米のとぎ汁で５分くらい煮た後、苦みを取るため１日水に浸ける。その間10回くらい水を取り替える。

③ ②を水切りし砂糖を入れて強火で煮る。汁がなくなるころ、弱火で煮詰める。

④ 冷えたらグラニュー糖にからめる。

阿部タカエさん（松程）

●その②

10月18日に行われた「うまいもの鍋コンテスト」で、みごと大賞を受賞した『心も体もリフレッシュ・ハーブすいとん鍋』を紹介します。日に日に寒くなるこれからの季節にぴったりな鍋です。

◆『心も体もリフレッシュ・ハーブすいとん鍋』

《材　料》（25人分）

鶏のもも肉４枚・白菜1/2個・もたし500ｇ・マイタケ３パック・シイタケ18枚・乾燥キクラゲ15ｇ・水2,700cc・ニンジン・みつ葉・酒・しょうゆ・みりん（適宜）

【すいとんの材料】小麦粉500ｇ・カントリソウ20ｇ・オトギリソウ酒30cc・水250cc・塩小さじ２杯

《作り方》① とり肉は皮と肉とに分け、皮はそのまま、肉は半分にし斜めうす切りにする。

② 白菜は１cmくらいの大きさでザク切りにする。

③ キノコ類は水でよく洗い、大きいものは手で裂いておく。（シイタケは細切り、キクラゲは水でもどして水を切る）

④ ニンジンは型抜きし２mmくらいの厚さに切る。みつ葉は２cmに切っておく。

⑤ ボールに小麦粉、塩、カントリソウ（細かくしたもの）を入れてよくかき混ぜ、水で割ったオトギリソウ酒を加えて練る。（スプーン２本くらいで落とせる固さに）

⑥ 大鍋に水1,000ccと、とりの皮を入れ20分間煮だし皮を取る。（この時のニンジンを柔らかくゆでておく）肉と白菜、水を入れあくを取りながら煮る。白菜が煮えたらキノコ類を全部入れ、調味料で味を調える。

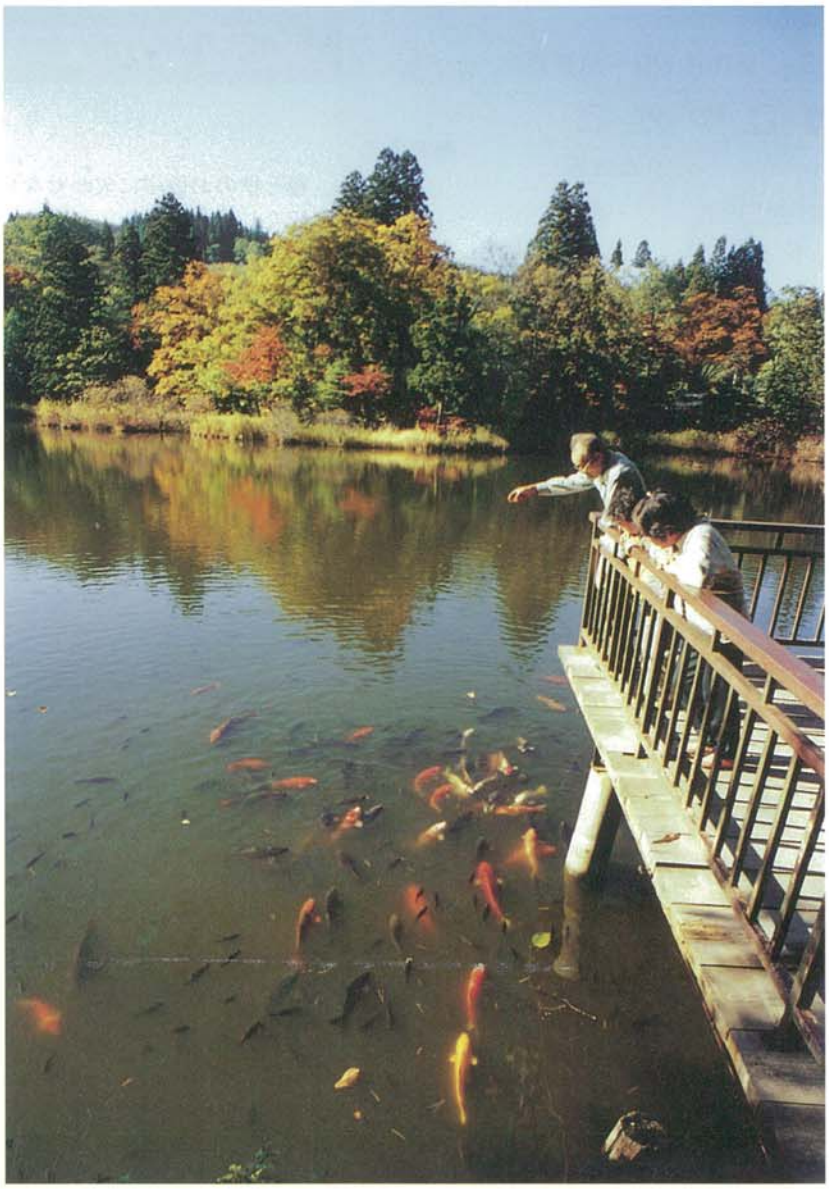
⑦ 最後にすいとんを落とし入れ、浮いてきたらできあがり。ニンジン、みつ葉を飾る。

《一言メモ》カントリソウは、糖尿病によく効くといわれています。

佐竹とめよさん（常盤）

■広報あさひまち　第504号　平成10年11月15日発行　■発行　山形県朝日町　■編集　朝日町広報委員会／山形県西村山郡朝日町大字宮宿1115　☎0237(67)2111　■印刷　豊田太印刷所

朝日町十景写真コンテスト入選作品⑱



●佳作「秋の大沼」

■撮影者　長岡百合子さん（大町）

ある秋晴れの日、久しぶりに「大沼の浮島」にドライブに出かけました。青空が湖面に映り、紅葉が美しく色づいていました。この美しい景色を、もっとたくさんの人に見に来てほしいと思いシャッターを押しました。（ニコンF3）

まごころBOX

■町に寄付

ふるさとづくり寄付金として、夏草の佐竹瑞穂さんより二十万二千円を寄付していただきました。

■町に防犯灯と設置工事を寄付

東北電力㈱寒河江営業所より防犯灯を四基、ユアテック㈱寒河江営業所より設置工事を寄付していただきました。

■町社会福祉協議会に寄付

殖銀朝日芝楽会より五万円を寄付していただきました。

情報BOX

町産業まつり

▼期日　十一月二十一日(土)・二十二日(日)

▼場所　町民体育館ほか

▼内容　商工業品の展示・特産品の販売・りんご品評会など

春 夏 秋 冬　編集後記

今月の特集は、町の文化財である丸窓の学校「旧三中分校」の保存、活用を考えるシンポジウムを取り上げました。

取材を通して驚いたことは、つい最近まで学校として使われていた三中学校が、全国レベルの文化財として非常に価値が高いということ。さらに、当時の建築手法にない丸窓を学校に造ろうとした発想や、そのざん新さに感心させられました。寺子屋の文化祭では、出演者のみなさんのいきいきとした表情がとても印象的で、私も楽しい一時を過ごすことができました。

シンポジウムに参加したある方が、こんなことを言っていました。「エコミュージアムの町づくりは、地域住民である私たちみんなが主役なんだね」と。この一言が、エコミュージアムの原点であると確信し、取材を終えました。（O）